技術士第二次試験に合格して

伊藤　寛幸

勤 務 先：
株式会社ルーラルエンジニア
計画・水利部門
〒001-0010　札幌市北区
北 10 条西 3 丁目 13 番
NK エルムビル

TEL 011-726-2411
FAX 011-757-2701
E-mail：hito@rural.co.jp
専門：農業部門（農村地域計画）

自己 PR

私は、エンジニア・エコノミストです。「あなたは？」と問われたら私はこうこたえるでしょう（皆さんは、エンジニア・エコノミストをご存知でしょうか？　エンジニア・エコノミストとは、公共土木事業を立案し、その経済性を立証するとともに政策提言を行うフランスの土木技術者デュピュイに代表される技術者集団の総称です）。繰り返しますが、私は、エンジニア・エコノミストです。

そんな私は、子供の頃より小学受験や中学受験を体験することによって〝受験力〟を培ってまいりました。こうした体験や経験が功を奏し、国家資格試験への抵抗感もなく、技術士試験に取り組むことができました。様々な意味で当時自分がおかれていた恵まれた教育環境にあらためて感謝しております。

高校に進学した私は、蛮カラに染まることとなり、足駄、腰に手拭いの旧制中学時代からの伝統的スタイルを貫き、世のファッション感覚とはかなりずれた高校生活をおくっておりました。おかげで、今でも、決して〝オシャレ〟とはいえません。外見的に単に無頓着というだけなのですが、ハイカラに対するアンチテーゼなどと称して蛮カラを正当化しておりました。そんな高校時代を過ごしました私は、酪農学園大学へ入学し、農業経済学を学びました。高校まで勉強嫌いな私でしたが、なぜか〝農業経済学の学問的魅力〟にとりつかれ、大学には 5 年間も籍をおくことになりました。卒業するも、学問に再び目覚めた私は、地元の農業団体を辞して再び酪農学園大学大学院へ再入学し、農業経済学の法則性と普遍性を探求することといたしました。その後大学院を修了した私は、当時（1990 年代初頭）の第 2 次シンクタンクブームもあり、現在の職場に勤務しいまに至っております。

技術士試験について

一般に、試験といえば、受験勉強がつきものですが、いま考えましても、これといった技術士試験対策に取り組んでいた記憶はありません。ただし、（前述しましたように）農業経済学という学問領域に身をおいております私は、地域農林経済学会、農村計画学会、日本農業経済学会…といった農業経済学系の学会員であることから、ほぼ毎日のように学会誌に目を通しております。この日々の積み重ねが、技術士試験対策として大いに役にたったと確信しております。皆さんも、是非、通常の読書に加え、学術雑誌に触れますことをお勧めします。必ず、文章を書く力が身につくこと間違いなしです。

こうして、筆記試験に合格した私は、面接試験のため試験日の前日に上京いたしました。気分転換のため渋谷の街を逍遥した私にとりまして、〝雨降り道玄坂〟だけが、東京受験の印象として深く記憶に残っております。

そして試験当日、筆記試験とはまた別の極度の緊張感のなかでの受験でしたが、〝初回受験・一発合格〟を果すことができました。〝合格〟って気分がいいものですね。

最後に

今後とも、私は、エンジニア・エコノミストであり続けます。

後藤　和則

勤 務 先：
株式会社ドーコン
地質部
〒004-8585　札幌市厚別区厚別中央１条５丁目４番１号
TEL 011-801-1570
FAX 011-801-1571
E-mail：kg1246@docon.jp
専門：応用理学部門（土木地質）

１．自己紹介

私は、北海道滝川市で生まれ、高校までは道内を転々とし、その後、大学時代の６年間を秋田で過ごしました。1995 年に大学を卒業し、生まれ育った北海道へとの思いが強く､北海道開発コンサルタント、現在の株式会社ドーコン地質部に入社することができました。

当社は主にインフラ整備に係わる総合建設コンサルタントであり、その中で、私は、道路事業に関わる地質調査を担当してきました。

道路事業に関する地質調査といっても、その内容は斜面防災、地すべり、トンネル、道路土工に関する調査など様々であり、かつ、自然相手の仕事だけに、全てを教科書通りに整理することが難しく、それぞれの業務を満足に遂行できるまでには、多くの時間を要しました。

現在は、主にトンネルに関わる中心とした地質調査に従事していますが､単なる地質調査だけでなく、環境に関する問題など、課題の多様化が進んでいるのが現状です。このため、既知の知識だけでなく、常に新しい事を学びながらの試行錯誤の毎日が続いています。

２．受検体験記

入社した当時､技術士と言えば､優秀な上司の方々が取得する特別な資格であり、当時は自分とは縁遠いものと強く思っていました。しかし、時代の流れは早く、気付いたときには自分も受検資格のある立場へと変わり、社内的にも技術士の取得が強く求められる時代に変わっていました。

最初は試験の雰囲気を知るためだけに、受検会場に向かいましたが、問題の質、量を目の当たりにして、全てにおいてその水準には、届いていないことを実感することになりました。その後、時間が経つにつれて、社内の雰囲気や学生時代の友人などに刺激されることで、いつしか自分自身も技術士取得を意識するようになり、結果としてこの心の変化が今回の合格に繋がったと感じています。

受検に向けての準備では、社内の支援体制が非常に有効であったと感じています。経験論文については、先輩技術士に何度も査読をしていただき、指導を徹底的に受けることをできたこと、また、専門問題については、社内資料である過去問題とその回答例を利用できたことが大きな助けになりました。さらに、口頭試験では、先輩技術士による模擬面接試験を受けることで、本番に向けて的確な準備ができたと感じています。

３．今後に向けて

今回、幸いにも技術士を取得することができました。しかし、技術的には未熟な面が多いこと、今後進むと予想される技術的課題の多様化を考慮すると、今まで以上に自己研鑽が重要と考えています。

また、技術士になることで、今まで以上に自己責任が重くなると感じています。特に、自分の判断が直接的に社会の安全性に深く関連する業種でもあるため、社会的責任を重んじることで、社会貢献を果して行きたいと考えています。

最後になりますが、今回の技術士合格は、私個人の力だけでは成し得なかったとであると感じています。お忙しい中、ご指導ご助言頂いた方々に、この場を借りて御礼を申し上げます。これから先、技術士という名を汚す事がないよう、努力していく所存です。今後とも、ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

伊藤　　丹

勤 務 先：
国土交通省
北海道開発局建設部
河川工事課
〒060-8511　札幌市北区
北８条西２丁目

TEL 011-709-2311
FAX 011-709-2144

専門：建設部門（建設環境）

１．自己紹介

私は1985年（昭和60年）に北海道開発庁に採用となり、石狩川、沙流川などの現場において、河川、ダム事業に携わってきました。その中で、地域との連携・協働による水害に強い安全で潤いのある地域づくり、魚類や水質などの河川環境保全に配慮した事業推進に取り組んできました。

また､バングラデシュの日本大使館勤務(1992～95年）では治水対策などの開発プロジェクト、大阪の近畿地方整備局勤務(2003～2005年)では、琵琶湖･淀川の再生プロジェクトに携わり、現在に至っています。

２．技術士試験について

⑴　受験動機

2005年に品質確保法が制定されて、発注者側においても、民間の技術力を公正に評価するなど技術力の向上が課題となっています。

また、総合評価型入札に加え、コスト縮減、新技術活用、環境保全など、技術力が求められる分野も広がりつつあり、自ら技術力の研鑽に努めることの必要性を日々感じています。

⑵　受験対策

学生時代に受けた公務員試験から長い間、試験などは受けたことがなく､年齢はいつしか40代半ばとなり、頭脳は錆びつき、内蔵は脂肪まみれとなり、とても試験に耐えうるような状態ではなかった。

「急がば回れ」､「できることからコツコツと」をモットーに、平成15年度から土木施工管理技士、技術士１次試験、土木学会技術者認定とステップアップを図った。各種の専門書、国土交通白書、国交省のホームページのチェック、土木学会誌、新聞記事を収集し、メモをするなど取り組みました。

⑶　不合格の経験が重要

平成17年度に臨んだ筆記試験では、建設一般５題、専門科目10題程度の解答案を準備しました。出題予想は概ね的中したが、専門科目で題意を勘違いする痛恨のエラーを犯し、不合格となった。

平成18年度は、これを教訓とし、とにかく冷静に出題者が求めている意図に忠実に解答するよう留意し、筆記試験を突破することができました。

口頭試験（渋谷フォーラムエイト）においては、経験論文に関する質問、技術士を目指す動機、専門知識、建設一般に関する質問、技術者倫理などについて、30分間の試験が行われ、できるだけ要領を得た答えを返すことに留意しました。

12月上旬の口頭試験から、２月９日の合格発表まで２カ月間の時間がこんなに長く感じられたことはなかったが、吉報をいただくことができた。

３．技術士としての実感

直接的に技術士の業務を行うことはないものの、CPDや技術者倫理などを常に意識するせいか､これからが本当のスタートであると実感しています。

また、技術職の定員削減、アウトソーシングの推進など、公務員に対する環境が厳しくなる一方であるが、技術士の視点を忘れず、行政経験を積むことによって、さらに技術面・人間面で成長できればと考えます。

一方、地球規模において、社会経済、環境、災害、エネルギー等の情勢がめまぐるしく変わる昨今であり、アジアや我が国の発展に寄与できる北海道づくりのために、技術士仲間が切磋琢磨して、貢献していければと考えています。

今年から、試験内容が変更になりますが、機会があれば再び合格の美酒を味わいたいと思います。

唐澤　弥生

勤 務 先：
株式会社ドーコン
交通部
〒004-8585　札幌市厚別区
厚別中央１条５丁目 4-1
TEL 011-801-1520
FAX 011-801-1521
E-mail：yk1546＠docon.jp
専門：建設部門（道路）

１．自己紹介

私は 1970 年（昭和 45 年）に江別市で生まれました。母の話しでは、幼い頃から出かけた先の小さな崖に見られる地層の縞模様に興味を持ち、小瓶にその砂を詰めて再現していたそうです。小学生の時に体験した有珠山噴火の際には、自宅付近に降った火山灰と室蘭市の祖父宅の火山礫を、宿題の絵日記に貼り付けて比較研究？していました。高校進学後も依然地球科学分野への憧れが強く、卒業後は新進のスタッフが揃っている静岡大学に入学しました。学生時代は、素晴らしい指導教官と仲間に恵まれ、貴重な時間を過ごしました。

平成 6 年に長野県の地質コンサルタント会社に入社し、地質の技術者として、地すべりにより被災した道路の復旧対策に関する業務や、県道付け替えに関する地質調査業務などに携わってきました。 8 年間の勤務の中では育児休暇も 2 度取得しました。子供が 1 歳になり復帰したと思っても、何かの際には母親業にウェイトを置かねばならず、上司や同僚、家族に随分と助けて貰いながら何とか勤務を続けてきましたが、子供の病気を機にしばらくは育児に専念しようと退職しました。その後、専業主婦を 2 年間経験しています。

平成 16 年に北海道に戻り再就職しました。現在は株式会社ドーコン交通部で、北海道の道路施策に関する計画業務などに携わっています。

２．技術士試験

技術士試験を受験した動機は、地質の分野を歩んできた私が道路の分野で一人前の技術者として認めてもらうためには、技術士合格しか無いと感じたからです。同時に、専門的な知識をしっかりと身に付けないと、利用者が本当に必要としている道路づくりに辿り着けないと考えました。

試験対策として、国土交通省や環境省の白書を熟読し、分からない部分や興味を持てた部分から WEB などを活用し、知見を広めることを繰り返しました。業務として捉えていた様々な施策も、改めて自分の生活に照らし合わせてみると、こんな道路なら便利だなとか、この様なシステムが広がれば生活が豊かになるなと思える部分が、当然ですがたくさんある事を再認識でき、徐々に吸収していけたように思います。

論文作成においても、口頭試験での回答においても、論理的かつ簡潔に説明する事が常に私の課題でありましたが、添削を受けたり模擬面接を繰り返す中で、先輩技術士の皆様に貴重なアドバイスや励ましのお言葉をたくさん頂き、実力以上の力を発揮することが出来ました。ありがとうございました。また、暖かく支えてくれた家族や友人にも深く感謝しています。

３．今後に向けて

ようやく道路の技術者として再スタートを切ることになりましたが、まだまだ力不足である事を言葉のとおり痛感しています。技術士という資格の持つ責任を深く捉え、技術力を高めるために今後より一層の努力を重ねたいと思います。また、様々な分野の出来事にも常にアンテナを張って知見を広め、より良い将来につながる数多くのヒントを捉える感性を育んでいく所存です。

誰でも利用している〝道路〟づくりに、生活者として、また女性としての私の視点や経験を活かすことで、次世代に渡す未来の社会づくりに貢献出来ればと考えています。